
望む男

山内 詠

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

望む男

【Nコード】

N1005U

【作者名】

山内 詠

【あらすじ】

一等兵のレベツカは突然副官への就任の打診を受ける。上官は有名なタイラー大佐で……。とある軍隊に所属する大佐とその副官である一等兵の物語。中佐と軍曹シリーズ、今回は望む男に知らない女。

要請（前書き）

この作品は「上司の苦悩」に名前だけ登場したタイラー少将とレベツカ軍曹の出会いの物語。シリーズ別作品と同様、雰囲気のみのお話です。

要請

副官にならないかと打診されたのは、新兵と呼ばれる時期をようやく過ぎた頃であつた。

「僕ですか？」

信じられないと顎を下げ気味に聞いたのはレベッカにしてみれば当然だつた。

そつだ、と困つた顔でうなずくのはレベッカ直属の上司であるレイリー少尉だ。

軍隊において副官というのはたった一人の上官のためだけに存在する特別な職務。

まあ簡単に言うと公式の愛人。

自慢じゃないけれど、レベッカは自分が女だと思われていないということをきつちりはつきり自覚していた。

だから、自分を”私”だなんて呼ばずに、”僕”なんて言っているのだ。

どんなに食べても太れず柔らかさのかけらもない身体。牛乳を飲むといいと聞いて腹を下すまで飲んだけれど大きくならない胸。そこそこ整っているくせに化粧が全く似合わないきつい顔立ち。

自分が男だつたらどれほどよかっただろう。そう思っているのはレベッカ本人ばかりではなかった。父も母も兄弟たちも絵にかいたようなかわいい娘を求めていたから、期待に応えたかった。

だが髪を伸ばしてもドレスを着てもメイクをしても、ちつとも女に見えないのだ。

母がブティックのショーウィンドウを眺めながらため息をつくよう

になったのはいつからだっただろう。スカートを履かなくても何も言われなくなったのはいつからだっただろう。髪を短く切ったら困った顔で似合うねと言われたのはいつだっただろう。

多分自分は生まれてくる性別を間違えたのだ。

いつしか女として生きることレベルは諦めた。

だから女として求められることが少ない軍隊に職を求めたのに。何の因果か初めてレベルを認め望んでくれたのは必死で頑張ってきた仕事ではなく、とつくの昔に諦めて投げ捨てた女という部分に対してであつた。

しかし、どうにもおかしい。そもそも副官というのは志願制である。こうして突然話が舞い込んでくることなんてあるはずがない。さらにレベルは一応女、というくらいのレベルであつて、とてもとても男性に好かれる要素なんて皆無だ。

「タイラー大佐は知っているかね？」

「はい、存じ上げております」

タイラー大佐の名前を知らないなんてこの軍ではそれこそモグリに等しい。なぜなら彼は新兵の訓練時に教材として映像で散々見せられる程の白兵戦のエキスパートなのだ。飄々とナイフや短銃を操る姿は感動さえ覚えた。

「彼が君を望んでいるんだ」

「はあ？」

ますます間抜けな返事をしたレベツカに、ああ、少し違うな、とレイリー少尉は言いなおす。

「……君のような容姿の女性がお好みなんだそうだ」

はつきり言われてようやくレベツカは合点がいった。そりゃあ志願した副官候補の女性兵士のなかに適役がいなくても無理はない。みんなむちむちぴちぴちむらむらな感じの美人ばかりだもんね。こんな胸もぺったんこ、手足はガリガリ、色気のかけらもない女なんてレベツカの知る範囲では皆無だ。

……自分で言っててちよつと悲しくなっただけ。

密かに落ち込むレベツカをよそにレイリー少尉は副官になることで得るメリットを次から次へと挙げていく。

給与・待遇・経験、どれをとっても今の環境では到底手に入らないものばかり。

……考えようによってはいいのかもしれない。

レベツカからすれば通常の場合副官となることの最大のデメリットである貞操やら恋愛の自由なんかは、そもそも諦めていたもので、大事に守ってきたものでもなんでもない。

軍属の男の夢、なんて言われている副官。

タイラー大佐はそんな副官なんて必要ないのかもしれない。

自分のような女がお好みだなんて、おそらく副官を断るための方便だろう。勝手な想像だけれど、あながち間違ってもいいはず。だって適役がレベツカしかいないくらいだし。

きつと副官になったとしてもさっさとお払い箱になるんじゃない？

控えめにレベツカは質問してみる。

「もしも大佐殿が僕を気に入らない場合は、どうなりますか？」

「その場合は君に慰謝料が支払われるはずだ」

慰謝料の金額はレベツカの想像よりも遥かに高い数字であった。すぐさま軍を辞めても一生食べていける。

……ちよつと、美味しい話かもしれない。

レベツカを抱ける珍妙な男なんていやしないだろう。

なら女としての名誉以外に傷つくものなんてない。どうせ軍にいても辞めても恋人ができることなんてほとんど考えられないのだから、かまいやしない。

だったら捨てたも同然の女という立場、売ってもいいんじゃない？

「……わかりました、お引き受けします」

その時レベツカの頭の中にはいずれ手に入るだろう慰謝料のことしか頭になかった。

しかしそれをだれが責められよう。

タイラー大佐の特殊な趣味など、レベツカは知る由もないのだから。

代替

生まれてこの方20年、男性に関する経験も知識も無いから余計にそう思えるのかもしれないが、副官としての研修はレベルカの想像を遥かに上回るものだった。今まで縁遠かったものが津波となつて押し寄せてきたのかと思えるくらいに。

研修内容の全ては上官に尽くすために必要な知識や技能で、それは最新のメイクやファッションの情報から、料理や裁縫などの身の回りの世話をするためのスキル、さらにはベッドの中の手練手管まで多岐に渡る。

たつた一人の上官のためだけに存在する副官という役職に求められるのは愛人という身体だけの関係ではなく、母であり恋人であり妻であり、すなわち女そのもののものだろう。

しかしレベルカを驚かせ打ちのめしたのはそんな研修の内容よりもなによりも、一緒に研修を受けている副官候補生たちであった。

彼女たちの側にいるといかに自分が女として出来損ないかということとを否が応でも意識せざるを得ないのだ。

華やかに装うことも出来ない。ふるいつきたくないような身体も持っていない。人を引き付ける美貌なんてかけらもない。

なのにそんな候補であり同性から見ても極上の美人ぞろいな彼女たちを差し置いて、レベルカは正式に副官となることが決まっている。しかも上官はタイラー大佐、軍の中で名実揃ったエリートの人だ。

本当にいいのだろうか。問いかけが頭をぐるぐると回り、そのたびに頭を振って追い出さねばならなかった。

何かの間違いだからレベルカが選ばれたのだ。どうせすぐお払い箱になる。

そう思うしかなかった。

副官候補生なら全員提出するはずの誓約書、要は性的な関係を結ぶことに対するあれこれの了承、もレベツカは出してない。

だからだろうか、どうしても自分を”僕”と呼ぶことを止められなかった。今更自分を”私”だなんて、今までの自分の全てを否定するようで嫌だった。なぜか講師役の者たちもそれを咎めなかった。レベツカにとって色々な意味で辛かった研修の最後を講師のエステル准尉はこう締めくくった。

「覚えておきなさい。私たちは無力だと。何の役にも立たない存在だと。」

だけれど彼らの戻るべき場所としていることが大切なのです。

私たちは彼らにとって戦場を生きぬく理由になるのです。

それは他の誰にも出来ないこと。だから己を磨きなさい。

愛しい男を離さぬために。誠心誠意努めなさい。

偽りや驕った気持ちで心はつかめないのだから」

……自分には偽りと打算だけしかない。

レベツカは熱心に聞き入る他の候補生たちに気づかれないように、大きく息を吐いた。

”僕”はみんなと違う

女の成り損ないだから。

全ての研修が終了した後、レベツカはエステル准尉と共にタイラー大佐の元へ向かうことになった。タイラー大佐がエステル准尉の上官であるディオヘネス中将与共に最前線の基地にいるためだ。副官は可能な限り上官の側にいること。そう決まっている。

舗装されていない道を軍用車が土煙を上げながら疾走していく。横に座るエステル准尉はレベツカの倍の年齢だというのに、ちっともそんな風には見えない。張りのあるなめらかで白い肌は素直にう

らやましいと思う。レベツカの顔には隠しようもないそばかすがある。これもレベツカが自分の容姿を貶める原因のひとつであった。

「レベツカ伍長」

エステル准尉から急に呼びかけられて、レベツカはあわてていつの間にしげしげと眺めてしまっていた視線を外し、姿勢を正した。今回の赴任に合わせてレベツカは一等兵から伍長へと昇級している。

「そんなに見つめられると照れちゃうわ」

花が綻ぶような笑顔とは、まさにこういうことを言うのだろう。きりりと前を見つめていた瞳が優しく細められ、レベツカに向けられる。

「し、失礼しました！」

「いいのよ、そんなに畏まらないで。基地あそこにいる副官は今のところ私とあなただけなの。

仲良くしましょ」

はい、と答えたいいいものの、仲良くと言われて一体どうすればいいのか。確かに同じ副官という立場ではあるがレベツカはまだ入隊したばかりのひよっこで、エステル准尉はもうレベツカが生きてきた年数と同じ期間を軍で過ごしている先輩も先輩だ。気安くするわけにはいかない。

ぎゃくにかちかちに固まってしまったレベツカをまるで労わるようにエステル准尉は話し続ける。

「……あなたで3人目」

「はい」

「タイラー大佐の副官としてきた人」

「はい？」

「だからがんばって欲しいの」

「つつこりとほほ笑みながらエステル准尉は簡単に言う。」

「あの……、ひとつよろしいでしょうか」

「うん、なあに？」

「僕で3人目ということは大佐殿の副官は、もういるんですね？」

「いないわよう。言ったでしょ？ 私とあなただけだって」

「聞いてない。」

「自分が3人目なんて今初めて知った。」

「ということはあの美女揃いの副官候補生たちの代わりってこと？」

「きつと今度こそ大丈夫ね。こんな可愛い娘が来てくれたんだもの！」

「いやいや、可愛くは全くないですが。」

「何かがおかしい。」

レベツカは当初の目論みがガラガラと音を立てて崩れていくような気がした。

……一体どんな人なんだ、タイラー大佐って人は。

特別（前書き）

7 / 6 追加があります。

特別

タイラー大佐は謎の多い男である。

多いどころか謎だらけと言っている。

レベツカは副官になる者として可能な限りの情報収集を試みたが、これまた全く個人的な情報が手に入らない。

というのも彼は中佐に昇進するまでほとんど表舞台に登場しないのだ。

軍に登録してある公式の記録を紐解いても出てくるのはせいぜい出身学校の名前やら入隊年月日、基地や部隊間の移動履歴くらいなもので、恐ろしいくらい個人としての経歴は真っ白。普通ならひとつやふたつありそうな若さゆえの過ち的なものすら見当たらない。

不自然な記録とは反対に噂の類はいくらでもあった。だがそれを裏付けるものがひとつもない。

しかし彼を軍属の者なら知らないものはいないのだ。

散々教材として覆面や防護マスクをかぶった姿ではあるが目にしているし、その武勇伝を教官たちはまるで我がことのように熱弁をふるっていた。それがまるっと全て作り話というのはなかなか考えにくい。それでも。

……もしかして本当には存在しない人なのだろうか。

何しろ写真の1枚も発見できてないのだ。

揺れる車内の中、ろくでもない想像ばかりが頭を巡る。

エステル准尉が言う「あなたが3人目」というのもよくわからない。そもそもレベツカは副官として落第しに来たというのに。

他にも同じようなことを考えていた副官候補生がいたってことなの

か？

ていうか副官ってそんなに簡単にコロコロ変わるもんなの？

軽く考えすぎていたのかもしれない。

女としての魅力なんてかけらもない自分の身体を売って慰謝料をだけを得ようだなんて深く考えなくてもうますぎる話だ。

名前だけは有名な、その実正体不明の上官の副官なんて引き受けるべきじゃなかった。

レベツカの顔から、徐々に血の気が引いてくる。脂汗まで滲んできた。

今一時の我慢だと思えたからこそ恥ずかしいを通り越して憤死しそうになりながら胸で男性を悦ばせる方法（レベツカのまな板では不可能なのだがやれと言われて半べそ状態で頑張った）だの下半身の締りを良くするための運動（トイレの前で教官に聞き耳を立てられる）だのなんとかこなすことができたのに。

うまい話には裏がある。諺には先人の教訓がこめられている。

何コレ、まるでホラーじゃないか？

きっとレベツカが割り当てられたのは間抜けで考えなしで

速攻殺されてしまう役。

背中をじわりと嫌な汗が伝う。

「あの、准尉殿」

「はあい、なあに？」

「副官を辞すことというのは、可能なのでありますか？」

突如さっきまで周囲に花がぼわぼわと飛んでいそ那样的雰囲気醸し

出していたエステル准尉の様子が一変ツンドラブリザード状態に替わった。ダイヤモンドダストがきらめく極寒の地の如く。

……レベツカの質問はどうやら地雷を思いつきり踏んだらしい。

「あなた、そんな軽い気持ちで副官なんぞ務まると思ってた？」

「ちつ違います！ 僕はただ、僕みたいな女でいいのかと思いましたがっ！」

胸もぺたんこ、尻もぺたんこで女としての魅力なんてゼロに等しいですからっ！ 准尉殿に比べてみすばらしすぎますから！

自分で言っていて悲しくもなるがまさしく軽い気持ちで副官になったレベツカは慌てて言葉を重ねる。とりあえず考えなしなのは確かなので認めるけれど、着任前に死にたくない。

しかし自分を貶める言葉は本心からのものだ。その分必死さは伝わったらしい。

言い訳は受け入れられられしく、エステル准尉はなあんだ、とまたかわいらしい笑顔になった。

……これで四十路とは本当に化けものである。

エステル准尉のツンドラブリザードは見る者にとてつもない恐怖をもたらす。笑顔のまま周囲を絶対零度の世界に誘うその姿は教官の時に垣間見ることがあった。見たからこそわかる。その状態でまともに対峙できる人物がいたらレベツカは無条件で尊敬する。きっと上官であるディオヘネス中將だって、無理に違いない。

「そんなこと気にしなくてもかまわないわ。何しろあなたは特別なもの」

「特別、といいますと」

「通常だったら私たち副官が上官の好みに合わせるのが当たり前だわ。

「けどあなたは違うんだもの」

「どこがどう違うというのか。女らしくないところだろうか。」

「知りたければ、本人にお聞きなさいな」

聞き返してもエステル准尉はふんわりとほほ笑むだけで答えてはくれない。

そうこうしているうちに車が目的地に着いてしまった。心の準備は全くできていない。

レベツカにはヒールの音を響かせて前に行くエステル准尉の凜とした背中をただ追うことしかできなかった。

「あれが新しい副官かよ」

「おい、副官って男がなれたっけ？」

「一応スカート履いてるんだから、女なんじゃねえの？」

視線とともにひそひそと、しかしはつきりぶつけられる言葉はレベツカに容赦なく突き刺さった。

副官になる前だったら軍服の下はズボンもあつたからスカートなんて履いたのは初めてだ。

先に行くエステル准尉のしなやかな背中からまろやかなお尻、そして続く芸術品のような脚線とは比べられない自分の棒のような下半身にスカートは全く似合わない。何しろレベツカにはくびれがないのである。スレンダーと言えば聞こえはいいが胸もお尻もぺったん

こ。女装の少年兵と言われる方がまだわかる。

散々言われ続けた言葉でまた傷つくなんて、大金に目がくらんで副官なんぞになってしまったからだ。

せつかく忘れよう忘れようとしていたのに、自分が女だと、それも紛いものの女だと思い知らされる。

女という武器を完全に封印し周囲に劣らぬようにと人一倍努力をしていたレベッカは男たちからは仲間として受け入れられていた。気を使われたりはしないけれど、同列に扱ってもらえることが何よりの誇りだった。

だからこんなあからさまに自分の容姿を誹られるのは、軍人というある種特殊な仕事を職業として選んでからは無かったことだった。

辞めよう。

副官も、軍も、辞めてしまおう。

馬鹿な選択をしたせいで、今まで築き上げてきたものを全て無駄にしてしまったんだから。

何もかも始めつからまたやり直せばいいのだ。

うつむいていた視線をまた正面に戻す。

覚悟は、決まった。

不意に扉の前でエステル准尉が立ち止る。

どうやら目的地、タイラー大佐の部屋へ着いたようだ。

「こちらよ。頑張つてね」

ドアの横に立ちにつきりとほほ笑んだエステル准尉の様子から、レベッカ一人で対面しなくてはならないようである。

目線で促され、レベツカは大きく深呼吸をすると、2回ドアをノックした。

特別（後書き）

なんだかレベッカよりもエステルさんの方が強烈ですね。

真相（前書き）

第3話に追加があります。

真相

「どうぞ」

返ってきた声は、思っていたよりも若い。

「失礼します」

部屋へ入り、振り返って扉を閉めて一礼。

そうしてようやくレベッカは声の主、タイラー大佐と対面した。

はずだった。

「ようこそ、私の副官」

満面の笑みで迎えてくれたのは、レベッカへ副官なんぞにならないかという話を持ちかけたあの人。

「……レイリー少尉？」

「そういう名前の時もあったね」

執務机に肘をついて軽く手を握りながら、タイラー大佐は含み笑いをこぼす。

しかし目の前にいたのはレベッカの元上官。

ごくありふれた茶色の髪に人懐っこい少し垂れた目、背は高くも無く低くも無く、およそ特徴というものがあまりない、男。

少尉という階級は士官学校出たてのルーキーの階級であり、レイリ

ーのようにいい年齢としの男ではよっぽど何かの事情が無ければありえない。本当のエリートたちを除いて、ルーキーたちはまず現場の洗礼を浴びるためにちよいと厳しい軍曹ぶかがいる部隊に配属になる。そこで鼻をぽつきり折られるくらいについていくかでその後が決まる。前者であれば早々に辞めていくか、転属願いを出す。後者であれば出世していく。どちらにしろ現場と呼ばれる下級兵士たちばかりの部隊からはいなくなる。

なのにレイリー少尉はレベッカが知る限りでは3年以上同じ部隊に所属していた。

そのためかレイリー少尉は部隊の中では”貧乏くじのレイリー”だの”万年少尉”だのと揶揄されていた、はずだ。

部隊では優しかったけれど上官と下士官たちの間をおろおろと行ったり来たりするような、苦勞症の人だった、はずだ。

しかし言われて考えてみれば、レイリー少尉は不思議なくらいしょっちゅう研修だの演習だので部隊を留守にしていた。あまりにも存在感が薄かったために、気にする人は少なかったが。

レベッカの部隊にいなかったときは、タイラー大佐になっていたというのか。

目を丸くして茫然と目の前にいる男を見つめる。

「そんなに目を見開いていたら目玉が落ちちゃうよ？」

何度見直しても目の前にいるのは見慣れたレイリー少尉。しかし軍服を彩る階級章は二頭の獅子に3本のサーベルを象った、紛れもなく大佐を表すもの。

ややこしいんだけどね。とタイラー大佐は執務机から立ち上がるとゆっくりと近づいてくる。

「私には名前がいくつもあるんですよ。レイリーもそのひとつ」

気づけばレベツカのすぐそばまでタイラー大佐が近づいてきていた。思わずレベツカは後ずさる。だけでもドアを開けてすぐのところ立っていたものだから、あっという間に逃げ場は失われてしまう。

「どちらが」

本当の姿なのか。問いは形にならなかったが、答えは返ってきた。

「どれも本物だよ、私のかわいいベツキー」

目を伏せたレベツカの顎をつかんで上を向かせ覗き込むと、タイラー大佐はまたにつこりとほほ笑んだ。

その笑顔に何故か泣きなくなった。

レベツカを、軍に入って一番最初に受け入れてくれたのはレイリー少尉だった。

女のくせに、女の方で、そんな言葉を跳ね返すつもりでがむしやらになつていたレベツカの肩をぽん、と叩いて「いつもよくやってくれてるね、ありがとう」とただ当たり前に労ってくれた。

とても些細なことだったけれど、女なのに、とか女の割にとか、そんな言葉はくつつけずにただ行為だけを評価してくれたのがどれだけ嬉しかったことが。

いくら頼りなくて情けない上官でも、恋愛的な意味は全くないが、レベツカは好きだった。

「僕を、騙したんですか、少尉」

「騙したわけじゃないよ、ベツキー。黙ってただけさ。」

それに万年少尉のままじゃ君を手に入れることなんてできないだろう?」

どうだか。レベツカは輕蔑の色を隠さずに言い放つ。
どの口でレベツカに副官の話を告げたのやら。

「僕で3人目と聞きました。

僕なんかよりよっぽどいい副官をお持ちでしたでしょう」

「うん、我慢できなかったから」

「はあ!??」

「君が、いちにんまえ一等兵になってくれるまで、もう長くて長くて、待ち切れなかったんだよ」

だから代わりにね、お願いしたんだ。レベツカって名前の副官を。
……”レベツカ”という名前は全く珍しくもなにもない。探さずともあつさり見つかるだろう。

しかし、そのためだけにあの美女揃いの副官たちを2人も自由にしていたのか。あまりのことにレベツカの頭は真っ白になった。馬鹿だろうか、この男。

それを許す上層部も上層部だ。しかしそれはタイラー大佐は馬鹿のような我儘が許される男ということである。

「君を見た時、もう僕の理想が服を着て歩いているのかと思ったよ」

「……男がお好きだったんですか」

副官となる前のレベツカはお世辞にも女と思えるような格好も行動

もしていない。

うつとりと言ひ募るタイラー大佐に、レベツカは冷たく返した。

「やれやれ、君は本当に自分の価値をわかっていない娘だこねえ」

タイラー大佐は面白そうに目を細めると、掴んでいた顎をまたぐいと引き寄せる。

「これからゆっくり教えてあげよう。私がどんなにベツキーを愛しているか」

レベツカの反論は、タイラー大佐の唇で塞がれた。

真相（後書き）

なんか中途半端な感じですが終わりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1005u/>

望む男

2011年7月6日20時44分発行